

平成27年度 第3回江戸川区総合教育会議議事録

- 1 開催日時 平成28年1月18日(月)午後2時
- 2 場 所 第一委員会室
- 3 出席者 江戸川区長 多田 正見
江戸川区教育委員会
教育長 白井 正三郎
教育長職務代理者 石井 正治
教育委員 上野 操
教育委員 松原 秀成
教育委員 尾上 郁子
- 4 執行部 江戸川区副区長 原野 哲也
経営企画部長 山本 敏彦
経営企画部企画課長 千葉 孝
教育委員会事務局
教育推進課長 柴田 靖弘
学務課長 住田 雅一
指導室長 稲垣 達也
学校施設担当課長 佐藤 弥栄
統括指導主事 中山 兼一

開会時刻 午後 2 時

多田区長

よろしく願いいたします。

今日は 3 回目の総合教育会議ということで、学校教育を中心に話題にしていきたいと思います。その後は、次回までに教育大綱を成文化いたしまして、最終回はその確認や補足をするということをお願いいたします。

学校教育についてと言いましても、学校だけで学校教育を考えるということとはなかなかできないと思います。やはり保護者との関係とか、周辺地域との関係の中で学校教育を考えることになるとと思います。

最近、放送大学で教育のことをやっていたものですから、興味を持って聞いておりました。学校の先生や、子どもたち、あるいは地域など、いろいろな方へのアンケートをもとにして、今学校を取り巻く課題を認識していくという話をしていました。

例えば、先生のアンケートで特徴的なこととしては、保護者の方の中で、以前と比べるとクレーマーが相当増えていると認識していることです。

また、保護者は、他の子どもは置いておいて、自分の子どものことに非常に深く関心を持つ傾向があるということ。例えば同級生全体のことを考えて、学校に意見を言ってくれるような保護者は少ないというようなことを言われておりました。

あるいは、学校に来てくださり、いろんな会合にも出てくださるけど、先生と一緒にあって積極的に学校経営に参画してくださる保護者が非常に少ないということ。

その結果として、先生方の取り組みの意欲に影響がありますということ。つまり、先生のやる気に影響が出てきてしまうという話でした。

ある側面の話だとは思いますが、そういうことも参考にさせていただければ

と思います。

松原委員

先般、新春校長会がございました。区長さんのご挨拶の後、教育委員会を代表して石井委員さんがすばらしいお話をしてくださいましたので、その話をお願いしてもよろしいですか。

石井教育長職務代理者

実は第2回の総合教育会議でも申し上げたことですが、よい学校というのは、どういう学校なのかなということを校長会でお話いたしました。立場によって、よい学校の定義は変わってきます。子どもたちで言えば、学校に行きたいと思うような学校。親御さんにすれば、この学校に通わせてよかったと思える学校。そして地域にすれば、おらが学校を支えてやるんだという、そういう意気軒高たる思いにさせてくれるような学校。そして先生の立場でいきますと、この学校をよくしたいという思いがほとばしるような学校。立場立場で違いますが、そのように思える学校というのが、よい学校だろうと私は思います。

では、よい学校をどういうふうにつくっていったらいいかということですが、これは帰属意識を高めることが大事だと思います。

そのことに対しては、第2回の際に「心のWINWINシチュエーション」という表現を使いましたが、とにかく学校をよくしたいと皆が思えるような学校づくりというのが、本質的に大切であると私は考えております。

松原委員

本当にいいお話だなと思って伺っておりました。私もそのような帰属意識というものが希薄化するといけないと思いました。ありがとうございます。

多田区長

いかがでしょう。上野先生、尾上先生。

尾上委員

学校をつくり上げていくうえで、帰属意識を持つことが本当に大切だと感じました。さらにもう一步、学校に焦点を当てたとき、今学校に求められているものは一体なんだろうと考えていました。

もちろん学校というのは、学力をつけることが基本でありますけれども、人間力、言い換えれば生きる力を身につけていく場が学校教育の場であろうと思っています。

石井教育長職務代理者

尾上委員のご発言に関連いたしますが、先生方について考えていることがございます。それは、先生方を見守る姿勢が大事であるということです。先生方は、先生になった瞬間に教育のプロになります。ですが、必ずしも初めからベテランではありません。でありますので、地域や家庭がサポートして差し上げるべきことは、まず先生方が教育に専念できる場というのを提供することであると思います。

さらに踏み込んで、もし必要であれば、教育そのものにもタッチをする。あるいはできる、そういう姿勢を持つこと。ただし、まずは先生が教育のプロですので、教育のプロがちゃんとプロとしての力を発揮できるように、土俵を整えて差し上げるというのが、家庭・地域の立場というように感じております。

多田区長

なかなか難しいことというか、大きな課題ですよ。

今、尾上先生がおっしゃったように、学校は授業を中心に子どもに対して影響を与えますので、知的なものが非常にたくさんあります。しかしながら、一面で根本はもっと大きい人間教育があるんだろうと思います。それは家庭でもできることですが、しかし学校でもまたやる、そういう教育というものがあると思います。

ですから、先生が負っておられる役割というのは大きいだろうと思います。それは道徳の時間だけのことではなく、先生が子どもにどういうものを見せながら教育をしていくかということになります。この部分は学校に期待をされる、一番大切なところじゃないかと思います。

知的な面では、授業のテクニックとか、教え方のノウハウというようなことがありますので、相当程度のことができる。しかし、もう一方のほうは非常に大きな課題であって、石井先生がおっしゃったように、大学を卒業して教員免許をとってどこかの学校に配属されたら、すぐ先生ということになる。

私も先生の入区式のお話しますけれども、今まで皆さんは学生でしたが、明日からは先生ですと。そういうふうに、保護者も呼ぶし、ほかの先生も呼ぶし、子どもも先生と言いますから、先生ということになります。しかし、最初は全然経験がないわけです。

結局、人間教育という面では、先生自身に相当な資質を、自己研さんしてもらわなければならないということになります。

先生は人間教育に、ある種の責務を負っていただくという、非常に重い役割を持つということです。その自覚と、自己の努力をお願いしなければいけないと、私は思います。

上野委員

前回、教育コミュニティという議論をいたしました。それは、地域と家庭、

そして学校という三者が総合的な協力関係をどのようにして構築していくかということだったと思います。

江戸川区は、他の区と比べて、伝統的に強い地域力があります。それをどんどん高めていったら、素晴らしい教育ができると思っております。

その中で、最初に区長さんがおっしゃった、家庭教育という問題です。私は、前回もこれが出発点だ、原点だと申しましたが、子どもたちが家族の中で原初的な人間愛というものを皮膚感覚で受け入れて育てられてきたという体験が、教育の原点だと思います。しかしながら、今そういう家庭環境が次第に失われてきていると思います。そういう中で、保護者のクレームと先生の意欲の減退という問題が出てきているのではないかという気がいたします。

また、いじめの問題にしても、積極的に立ち向かっている先生が少なくなっているという現象にもつながっているかと思えます。

しかし、そういう問題も、地域社会の人たちが応援できるように、学校内での情報を抵抗なく地域社会や保護者たちに提供できるような体制づくりが必要です。そして、それを保護者と先生と学校と地域社会が一緒になって、解決するという体制。コミュニティを活用すれば、いろいろな問題が解決できるのではないかと考えております。

白井教育長

地域力を活用しての取組としては、言うまでもなくすくすくスクールや学校応援団などがございます。私はよく講演させていただくときにお話するのですが、子どもの居場所を一つの家とするならば、家庭と学校が柱です。柱だけでは家は潰れてしまいますが、地域が梁になっていることで非常に強い子どもの居場所になっている。それが江戸川区の地域の教育力となっていると思います。

上野委員

最近、新聞やテレビで、江戸川区の学校教育について昼休みなどの休み時間中に学校の児童がみんなで集まって、いろいろな遊びを通して体力づくりをしているということが出ていました。また、スマートフォンの使用に関する情報モラルについても報道がありました。大変よいことだと思います。教育長さん、ご説明をお願いします。

白井教育長

まず、休み時間の昔遊びですが、江戸川区の子どもたちの体力を上げなくてはならない、全体のレベルアップをしなければいけないということがありしたので、2年ほど前に、西葛西小学校から始めました。22種目の昔遊びを学校の先生が習って、25分間の休み時間に子どもたちに教えたところ、体力が大きく向上したというものです。来年度は全区的に、全ての小学校で実施いたします。

それから、情報モラルについてです。これも今の課題だと思いますが、家庭の問題も大きいと考えております。家族で食事をしていても、スマートフォンしながら食べているようなところがございます。

そこで、子どもたちが自分たちでルールを考えて、保護者が確認した上で、学校にも提出する。学校でもルールを守れているかどうかを確認する。情報モラルに関する双方向の健全育成対策ということで行っているものです。

上野委員

昔遊びを通じた体力づくりを全校に取り組んでもらうのは、大変いいことだと思います。私の子どもの頃は、近隣の子ども同士の楽しい遊びがありました。今の子どもたちには、そういう遊びがないわけです。遊ぶこと自体が子どもたちの体力づくりになることは勿論ですが、同時に人間関係、きずな

づくりにつながるということが重要だと思います。さらに、いじめ防止の力になると思います。

多田区長

今、上野先生がどちらかというとなガティブな話をされました。いろいろな問題が学校にあって、そういうことに対して、誰かが正常な形に持っていくような、そういう体制というようなものが、考えられていいのではないですかというのが、最初の話ですね。

上野委員

そのとおりです。

多田区長

そういうテーマは非常に大切なことだと思います。

学校に先生として、あるいは保護者としてかかわってくださった方々としてどうですか。

松原委員

地域とのかかわりの中で、教師も、指導力を身につけていきます。その際、いつも協力をしていただけるのが、PTAの会長さんを中心に役員の方や町会長さんをはじめとする町会・自治会の皆さん方だと思います。

本区には、各小・中学校でもこのような地域力が育っていると私は思っています。その中でキーワードとなるのが信頼です。子どもと教師の信頼、保護者や地域と学校の信頼、それは定期的に議論をしていく必要があると思っております。

多田区長

そうですね。先生の考え方の中で、方法論というのはいろんなものがあると思います。だから、そういうことをしっかり議論していったほうがいいなという、それはもう確かですよね。

上野委員

昨日の毎日新聞に、江戸川区の子ども未来館のふるさとづくり大賞受賞という記事が掲載されておりました。江戸川区の子ども未来館は、地元の大学教授や区内で働く農家、中小企業、職人などを講師に招き、子どもたちにもものづくりの楽しさや大切さを教える機会になっていると報道されておりました。これはまさに地域の教育力だと思いました。

それから、今年度末で閉校となる平井第二小学校の施設を東北大学関係の施設とするというような話も報道されておりましたが、区長さん、ご説明していただいてもよろしいですか。

多田区長

平井第二小学校の方から説明いたします。東北大学が東京に拠点を持ちたいということで、マンションを借りてキャンパスをつくり、そこで日本人や東南アジアの学生等を受け入れて、かなりレベルの高い教育を始めました。最初、学生は40何人だったと思いますが、英語で全部授業をやります。今後もっと拡大したいのだが、マンションではできないので、平井第二小学校の施設を使わせてくれませんかという話がありました。

これから大学の本部で、校舎を見て、どうしていこうかということを考えていくということです。私たちとしては非常にうれしい話です。

江戸川区と協定を結び、この大学の一つの柱として、地域貢献ということをやっていくということです。地域貢献の協定を結びましたら、どういうこ

とができるかということは、区民のためにオープン講座を開くということもできるでしょうということを、東北大学が言ってくれているところです。

今のところは、まだ始まっていませんが、新年度になったらいろいろ手がけていくという状況です。

次に子ども未来館についてご説明いたします。江戸川区には、昭和33年から科学教育センターがあります。これは、小学校版、中学校版がありまして、年間を通して子どもたちを募集し、様々な学校から集まった生徒が1年のスケジュールの中で勉強します。学校ではやらない勉強ということで、非常にいい取組だなと、私は教育長のころから思っていました。

科学教育センターは、科学技術ですから、理科が中心です。もっと幅広い内容、例えば動植物もそれから自然環境も天体も、それから郷土史など。学校ではそこまでできませんというものでも、興味をもって勉強したいという子がいるかもしれない。

ということで、2010年に始めたのが子ども未来館です。いろいろなコースを試行錯誤で考えながら実施していたところ、多くの子どもたちが来てくれました。区内全域から来る子どもたちですが、年間通したカリキュラムでやる子もいるし、夏休みの短期でやる子もおります。

一昨年だったと思いますが、早稲田大学の法律の先生が憲法と刑法を教えてくださいましたが、その内容を本にして出版しました。私は早稲田大学の総長さんに会う機会がありましたので、その本を見せたところ、これはうれしいですねと言ってくださいました。

尾上委員

子どもを育てるといのは、本当にたくさんの力が必要だと感じています。そのような中で、今、チーム学校という考え方が出ていると思います。

読売新聞では、10月に8回、チーム学校の特集を組んでいました。チー

ム学校というのは、学校の総合力を高めて、教育の質を向上させること。一人一人の子どもに向き合って、細かく対応する、そういう力を集結するという意味のよさがあると思います。学校の先生が一人一人の子どもたちに向き合う時間をより取れるようになります。私はぜひともチーム学校をしっかりと進め、総合力で子どもたちへの教育に力を注いでいくことが大切だと思います。

石井教育長職務代理者

私がPTA会長を拝命したときに、どういうふうに物事を考えていったらいいのかなというのをよく考えました。そのときも、先ほど区長がおっしゃったクレーマーですとか、モンスターペアレンツの問題は、いろいろなところで散見はされておりました。

まず、その原因から考えたのですが、自分の子どもだけがよければいいというような考えで入ってくと、モンスター化するように思います。一方で、もう少し視野を広く取ってみると、学校も一つの社会ですので、ある人だけがよくなるという状況は絶対にあり得ない。もしある人をよくしようと思えば、全体をよくするというのが、一番の近道だと信じるに至りました。そこで、学校も一つの社会なんだ、だからこの社会を皆でよくしましょう。皆でよくするということがあなたの子どもさんもよくすることに直結するんです。だから、PTA活動なり学校関連の活動に積極的に参画をして、皆でよくなっていきましょうというような発言をした覚えがあります。

松原委員

少し先程の科学教育センターの話に戻らせていただきます。この科学教育センターというのは、江戸川区独自の取り組みでございまして、今現在は小学校で9センター、中学校が5センターあります。

私が現職のころには、区民の指導員はいませんでした。ですから、若い先生方が土曜日は輪番で担当するような形でやっておりましたが、今は区民の指導員が参加しております。

それから、日本のしらべも、もう20年を超えております。ですから理数教育・科学教育と、日本の伝統文化という、二つの大きな柱を考えてみても、地域力を学校教育に活用していると言えると思います。

上野委員

江戸川区の地域力ということでは、私が幼いころ遊んでいた二之江古川にはきれいな水が流れていましたが、戦後は家庭の雑排水でどぶ川になってしまい嘆いておりました。それが親水公園化したんです。うれしく思いました。それに対して、国から高い評価を受けました。

すくすくスクールも、国から評価されています。江戸川区がいいと思ってやっていることが、国のレベルから見てぜひ全国に広めてもらいという要望があるようです。江戸川区民としての誇りです。

多田区長

皆様の熱意でいろんなことができるといいなと思います。

上野委員

小松川や新川の千本桜とか、桜をみんなで管理するというのもそうですね。自分の家の前の道路の桜とか、寄付した桜のグループがあって、年間を通じて面倒を見るとか、そういう環境づくり体制は素晴らしいことですよね。

多田区長

子どもたちが、そういうことを身近に体験して、地域の人もお互いにすば

らしいなということ共感する。そういう中に、子どもたちがいることによって、地域の心が宿っていくという、そういう環境をつくって育むということが大切だと思います。

江戸川区は、緑化運動を50年もやってきたとか、公園もどんどん増やしたとか、区画整理もやれば道路もつくり、下水道も入れた。いろいろなことをこの半世紀はやってきました。

今育っている子どもたちは、もうそれを通り過ぎてから育っていますが、以前の子どもたちは、そういうことを見て育っている子が多いです。だから、これからの子どもたちにもそういうことを教えていきたいと思います。

周年の学校では、記念誌をつくってくれますが、どこの学校も非常に丁寧に地域の歴史を書いています。非常にいい副読本になります。私は、式典の前に丁寧に読んでいきますが、知らないことがいっぱい書いてあります。地域を教える、勉強してもらおうということは、周年の記念式典だけではなく、授業の中でも教えてくださっていると思います。

この度、区歌の4番を募集して、葛西二中の生徒さんの作品が選ばれました。国語の時間にグループ分けして、みんな書いくれたそうです。当選するかしないかわからないですけど、挑戦してくださったということで、ありがたい取り組みをしてくれたと感じております。

上野委員

いい歌詞ですね。

多田区長

いい歌詞です。5人の合作とのことですが、生徒さんたちにとってみれば、やっぱり忘れられない記念碑みたいになるでしょう。非常に心に残るものになると思います。そういう活動を丁寧にやっていただくと、郷土愛を培うと

いうことになり、教育的にも、非常に意味があることだと思います。

白井教育長

ある学校の校長先生は、卒業式では4番まで歌うから頑張ろうって学校だよりも書いていましたね。

上野委員

必ずしもオリンピックに向けての内容ばかりではないですね。人々の将来にわたっての希望がつながっていくような、素晴らしい歌詞ですね。

多田区長

そうですね。もう新年会で三つの団体が歌いました。伴奏は、式典のときの少年少女合唱が歌ってくれたテープを使っているそうです。

石井教育長職務代理者

区長さんも初めにおっしゃっていましたが、教育は学校だけじゃなくて、家庭も地域も当然かかわってくることでありまして、そのような意味では、地域教育力や家庭教育についても考えなければならないと思います。

私自身PTA会長を終わりましたときに、多田区長から感謝状をいただきました。そこには、「地域教育力向上に貢献し」ということが書かれておりました。地域としては、環境を整えることで、子どもたちの落ちついた心を育む、それがまず1番目に大事で、2番目としては、求められれば教育そのものにも応じると。そのようなことが地域教育力なのかなと感じました。

一方では、家庭教育では、落ちついて考える、あるいは落ちついて学ぶ、そういうことの習慣づけが大事であると思います。そういう習慣づけができますと、自分の立場だけからでなく、ほかの人の立場で考えることができる

ようになります。これは、その先には協調性、あるいは共感性を持った生き方ができるようになるということだと感じています。

家庭教育では、進めるべきことと、進めないようにするべきことというのがあると思っています。まずネガティブな意味で必要なことといたしましては、電子機器から離れる時間というのをきちんと設けることだと思います。

一方で、ポジティブな意味合いで必要なことといたしましては、本を通して、ほかの人の人生そのものを生きてみるというようなことだと思います。

松原委員

大賛成ですね。学校からの宿題とか課題に対して、家庭が目やり評価する。こういういい関係がないと、子どもたちの基礎学力とか、健全育成は実現していかないと思います。

多田区長

社会の中で、スマートフォンのような新しいものがあると、大人だけというわけにいかないし、拒絶するわけにも、規制するわけにもいかない。そういう中でああいうものに毒されないで、子どもの時代を過ごすということは難しいことですが、保護者と先生が協力すると、ある程度のところまではいけるような気がいたします。ああいうものが、いじめに非常に深くかかわりを持ってきているわけですね。

石井教育長職務代理者

その意味では、スマートフォンなどについては、時間を決めてやりましようというようなことが、家庭ルールづくりの中でも謳われていましたね。

白井教育長

これから、そのようなことを一人一人の子どもたちが、自分の約束事にする。家族との約束事にする。それから先生との約束事にするということで、やってみましょうということです。

尾上委員

今の子どもたちの電子機器の使い方は、心配な面がたくさんありますね。仮想世界に入り込んでしまったり、自己中心的考えに偏ったり、私は子どもたちにとって大事なことは、人間と人間のふれあいをたくさん体験させていく中で、バランスのよい育成があると思います。

また、学校においては、子どもにとって教師の存在というのが最大の教育環境でありますから、先生がどんな志を持ち、子どもたちに接しているかということが、子どもの成長に大きな力になってくると考えています。

上野委員

教育委員会の基本方針に「児童・生徒によりよい教育環境を提供するため、地域・外部人材の支援活動を含めた特色ある教育活動が実践できる環境と体制づくりに努めます。また児童・生徒が安全・安心な学校生活を送ることができるように、学校施設の適正な保全・整備と災害時等の危機管理体制整備に努めます。」と謳われています。

阪神や東北のような大規模な天災が起きてくると、特に江戸川区の場合、江戸川や荒川の上流が決壊したときの被害は想定以上のものだと言われています。

最近、区長さんが中心になって、江戸川区、葛飾区、足立区ばかりではなくて、荒川区とか江東区とかの広域な範囲で協力し合う取組を進めていると聞きました。そのあたりのことを教えていただきたいのですが。

多田区長

様々な災害がありますが、典型的なのは地震です。様々な対策を講じておりますが、その一つが道路整備や建築物の耐震化や不燃化など、街全体を強くするという事です。

実際に災害が起きたときに、どう行動するかということについては、全て誰かが助けてくれるわけではないので、自助や共助にもしっかりと取り組んでほしいと思っております。そのためには備蓄を確保することや、家庭の約束をきちんと持っていただくなど、いろいろなことがあります。

災害時に、行政がきめ細かく対応できない部分もありますので、共助でやっておかなければいけないところもあります。そのため、防災訓練をやっておりますが、このような災害の問題は幾ら備えても、これでもう万全ですねということはありません。ですから、いろいろな不安が起きてくることは当然だと思います。

もう一つは水害の問題もあります。これは昨今の気象状況からすると、想定外の規模の災害が起こる可能性もあります。台風がくるかもしれませんし、上流が決壊するかもわかりません。鬼怒川みたいなことが起こり得るわけです。そのような災害における避難の問題について、私たちは今、江東五区に働きかけております。これは、江戸川区だけではすまない問題であります。さらに、五区だけでも決着がつけられない問題であり、気象庁や国交省や東京都、さらには交通機関もありますし、警察消防もある。様々な機関と、どういう連携が果たして可能なのかということだと思います。

例えば、ニューオリンズの災害は台風や高潮でした。36万人の人口ですが、同じような災害が起こった際には、上陸する前にみんなで避難しましょうという計画を持っております。具体的な避難の方法まで定められており、非常にわかりやすくなっております。

そのような計画を策定できるかどうかは別ですけど、江東デルタの地域

は、運命共同体ですので、みんなで力を合わせていきましょうということです。しかしながら、これで大丈夫ですよということは言えません。だから、まだまだこういう課題を乗り越えなければいけないということを、研究していきたいと思っております。

上野委員

学校関係においては、授業中に災害が起きたときには、各校が統一的な見解で子どもたちを守ることが徹底され、それが保護者にも周知されていると、非常に安心感があると思います。そういうことを、我々としても考えていく必要があると思います。

白井教育長

担当のほうから、一言お願いします。

柴田教育推進課長

各校、危機管理マニュアルというものを策定しておりまして、すでに保護者にも災害時の対応について、通知しているところでございます。

尾上委員

東日本大震災から約5年がたとうとしています。釜石の奇跡と言われたように、教師の教えというのは、想像以上に子どもたちの心に入っていくということがあると思います。やはり学校教育というのは、本当に大事なことだと思っております。

多田区長

今は5万2,000人の子どもがいて、学校も100校以上あって、大変

大きな規模だと思えます。非常に大きな集団ですので、様々な問題が日常的に発生していると思えます。

先程、チーム学校の話もありましたが、つまり皆さんが共通の目標とか、理念をしっかり持って、力強い教育界というのをつくり上げていくことが、様々な問題を最小限にしていくことにつながると思っております。

総合教育会議の考え方としては、地域の大きな教育力をどう評価するかということ、さらにそれを活かした教育活動をどのように実践をするかということだと思えます。

石井教育長職務代理者

私ども教育委員会、そして区長さんも含めて、先生方に寄り添って、よりよい教育をしてもらいたい。そのために行政としてできることについて、ベストを尽くしてやっていくという立場であると思っております。

ですので、先生方には本当に教育活動を通して自己実現されていかれるような、そういうライフプランを持って頑張ってもらいたいと考えております。

上野委員

小学生のころの体験で、いまだにきちんと胸におさまっている、女性の先生から教えてもらった言葉があるんです。それは、「情けは人のためならず」という諺です。先生は「みなさん、ほかの人に対してはできるだけ親切にしてあげるのですよ、ほかの人に親切にしてあげると、結局それがめぐりめぐって、自分のところに返ってくるのです。世の中は、そういうふうにできているんですよ」と言われました。

そのとき私は素直に、そうか世の中はそういうふうに行っているんだと信じてことができました。そして、いまだに私の老いた胸の中に確と納まっております。法律を学ぶ学生になったときに、最初にやることは人間存在の本

質論です。人間は本質的に社会的存在であると同時に個人的自覚的存在である。この一見相矛盾する二つの性質を宿している人間社会には、自ずからその秩序を保つため、社会規範というものを生み出すものである。云々と。

ですが、私にとっては「情けは人のためならず」という古くから言い伝えられてきた日本の諺の方がずっとわかりやすいと思っておりました。

ある宗教学の先生が大学で、「情けは人のためならず」という言葉はどういう意味かと質問したところ、半分くらいの学生が、現代のような自己責任の競争社会では、やたらに他人に情けをかけない方がよい。結局はその人のためにならないからという解釈でした。

驚きました先生は、日本語が非常に上手なあるアメリカ人に、「情けは人のためならず」というのは、私はこういうふうに解釈している。しかし学生は半分くらいこういうふうに解釈している。あなたはどう思いますかときいたら、人に情けをかけたらめぐりめぐって自分のところにかえってくるということは、いったい誰が証明、保証するのですかと逆に質問され、私は学生さんたちの言うほうが正しいと思いますと言われたそうです。

私が言いたいのは、社会はそういうふうに行っているという社会観、人間観は、理屈や証明の問題ではなく、原初的な人間の情緒ないし情操だということです。それが道徳や倫理のもとにならなくてはならないのです。

私は前回も「惻隱の情」ということを申しました。また柴又の寅さんの話では、相手方の立場に立って考える考え方ということを書きました。人間教育も道徳教育も結局はそこに尽きると思うのです。

多田区長

そうですね。そのとおりだと思いますね。

今のお話ですけど、私も元日の朝にラジオである人の話を聞きました。人の立場を理解するという点について、なかなかいいお話でした。人には、

それぞれ自分の主張や考え方があるため、お互いの立場を尊重しなければならないのですが、自分が相手の立場に立って、その同じ心境を味わうというところでなければ、物事を本当に理解したとことにならないということでした。

その先生はシンパシーとエンパシーという言葉を使っていましたが、シンパシーは共感、エンパシーは人の立場に立ち、その人の気持ちを思いやるという意味だったと思います。

今日はこのあたりでよろしいでしょうか。

どうもありがとうございました。

閉会時刻 午後 3 時 3 5 分